やるぞ！一期生

公立一貫校・屋代高付属中の初年度

<3>

独自授業 科学リテラシー

意欲的 パソコン習得

「変換ってどれ押すの？」。女子生徒が隣に座る友人に尋ねながら人さし指でたどたどしくキーボードをたたく。近くの席では手元を見ずにさっそうと文字入力する男子生徒もいる。屋代高校付属中学校が独自に設けた授業「科学リテラシー」の一環で、6日からパソコン学習に取り組み始めた1年A組。パソコンの習熟度は生徒によってまちまちだ。

リテラシーとは、一般に「言語を読み書きできる力」をいう。同校の科学リテラシーの授業は、中学3年間を通じてパソコンの使い方からグループ研究、卒業論文などに取り組む計画。複雑な現代社会に適応できる思考力と表現力、探究力といった能力を身に付ける狙いで、第1段階として1年次は2週に1回（年間17・5時間）、コンピューターの活用法を中心に学ぶ。

児玉隆副校長によると、市立中学では主に3年次の技術の授業で情報学習に取り組むという。一方、同校では、1年生のうちに文章入力や表計算、プレゼンテーションといったパソコンスキルを身に付けることで、資料作成や意見発表など多くの場面で今後必要になる能力を養う。

自宅でパソコンを頻繁に使うという1年A組の小林悠希君は「まだキーボードを見ないと打てないので、早くタッチタイピングができるようになりたい」と意欲的。宮下美羽さんも「リポートを書くときには必要なので、しっかり勉強して発信する力をつけたい」と、始まったばかりのパソコン学習に精力的だ。

「文字入力程度の技術ならパソコンを扱っているうちに自然に覚える」。授業を担当する谷口徹博教諭は、生徒間のパソコン経験の差を気にしていない。学びたいという生徒の旺盛な学習意欲が、おのずと技術を向上させると考えるからだ。

「科学リテラシーは、他教科で学んだことを生かして自分の意見を発表し、クラスメートと議論する場。まずはそのための素地を整えたい」。授業本来の目的は基本技術習得の先に見据えている。

（次回は7月上旬掲載の予定）

コンピューター室で文字入力を学ぶ生徒たち